

二〇二五年一月六日 おのみち文学三昧 研究発表会

夢野久作「死後の恋」論

——〈私〉と〈あなた〉が構築する独白の構造——

日本文学科三年 二〇二三二〇三九 宮元望

第一章 作家紹介・夢野久作

一八八九年一月四日～一九三六年三月一日。小説家。福岡市の生まれ。創作の筆をとったのは一九二二年頃からで、杉山萌円の筆名で童話『白髪小僧』（誠文堂、一九二二年一月）を出版、一九二六年五月には『新青年』の創作探偵小説に応募し、「あやかしの鼓」が二等に当選した。夢野久作の筆名を用いたのはこのときが初めてである。その頃から「ドグラ・マグラ」の構想をあたため、書き直し、この一二〇〇枚の大作は一九三五年一月になって初めて松柏館書店より刊行された。一九三六年三月一日、来客と対談中、四七歳で急死したが、彼の示したデモニーニッシュな文学世界は、推理小説といった狭い枠を越えて読まれている。

参照・尾崎秀樹「夢野久作」（ジャパンナレッジ版『日本近代文学大事典』）

最終閲覧日：二〇二五年五月二六日 ※一部表現の変更や内容の省略を行った。

第二章 梗概

浦塩の町で噂になっている、奇妙な風体の男ワーシカ・コルニコフが語り始める。コルニコフは三か月前まで白軍に所属していたが、あるとき友人リヤトニコフから身の上話を打ち明けられる。彼は両親の形見である宝石の粒々を見せ、自分が実は身分ある者であると話した。コルニコフは彼の持つ宝石が欲しくてたまらなくなり、「今度の斥候旅行でリヤトニコフが戦死しはしまいか」という頼りない予感のもと、斥候へ赴く。その斥候の途中、コルニコフ一行は赤軍から銃撃を受ける。森へ逃げた白軍の兵士たちは残酷な方法で殺され、巨大な樹の幹に一人ずつ括りつけられた。リヤトニコフも一際大きな樹の幹に吊り下げられ絶命していたが、その肉体が女性のものであることが判明する。その後コルニコフは彼女の腹部に猟銃で撃ち込まれた宝石を探り取ったことを告白して語り終えた。この奇妙な話を信じるという「あなた」にコルニコフは感謝し、お礼に宝石を捧げようとするが拒まれる。

第三章 考察

第一節 はじめに

夢野久作「死後の恋」は、一九二八年一〇月、博文館より発行の『新青年』第九卷第一二号に発表された。翌年には、改造社より出版の『夢野久作集』に収録されている。

先行研究では、本作品における「現実」と「虚構」の二重性や、コルニコフの語りの信頼

度、結末の一文に表出する感情、物語の真偽の判定を巡って「宙づり」状態になるという読者の役割などに言及しながら、作品の解釈が行われてきた。

本発表では、語り手〈私〉と独白の受け手〈あなた〉（注一）について検討する。両者に焦点を当てることによって、一人称独白体の語りが「死後の恋」においてどのように活かされているのかを明らかにしたい。そのために、まず、作中の言及や校異から語り手の人物像を分析する。次に、先行研究の指摘やロシア皇女アナスタシヤ（注二）の生存伝説を踏まえ、本作品にみられる「現実」と「幻想」の要素を整理し、史実と物語のつながりを見出す。そして、独白の受け手として存在する〈あなた〉について考察を深めていく。

第二節 〈私〉という語り手

本節では、語り手がどのような〈私〉として設定されているかを分析する。

まずは作中の言及から確認する。語り手は〈ワーシカ・コルニコフ〉という〈二十四〉歳の男性である。現在は〈旧式のポロ礼服〉を着て、髪や髭に白髪が混じった老人の容貌だが、〈今から三か月前迄は間違いなく二十代に見え〉る若い白軍兵だったという。〈旧露西亜の貴族の血を享け〉た一人息子で〈生え抜きのモスコ育ち〉、先祖代々からの宝石愛好趣味を引き継いでいる。さらには、〈モスコの大学に這入って、心理学を専攻〉した経歴や〈純な王朝文化の愛惜者〉であることから、人文学的嗜好を持つていることも窺える。また、〈ここでいよいよ私は、この浦塩の名物男となつてしまいました〉、〈……現在の私が、もし人々の云う通りに精神病患者であるとすれば、その時から異常を呈したものに違いありません〉などの発言から、自らの〈異常〉性への認識がほのめかされている。語り手たる〈私〉は、ひとりよがりな語り手である一方、ある程度自分のことが客観視できているということが示されているのだ。さらに、コルニコフは「私は決して作り飾りを申さない」と二度にわたって発言する。独白の受け手である〈あなた〉、ひいては自分の語りに対して、〈私〉は嘘を混ぜずに語ろうとしている。本名や年齢、出身、経歴、そして友人リヤトニコフが持つ宝石への欲望までもすべて正直に打ち明け、自らの信用性を高めようとしているのだといえる。

つづいて、校異の面から語り手の人物像をみていく。夢野は本作品に対して三回ほど改稿を行っている。いずれの修正も細部の表現に関するもので、内容面に大きな変化はない。ただ、「死後の恋」の校異の中には、初出の表現から最終的な表現へ定まる過程で言葉が追加され、より丁寧な言い回しに変化したものがいくつもみられる。そこで二つの場面A、Bを選定し、言葉が追加された校異を合計一〇個取り上げて表（八ページ参照）にまとめた。Aはリヤトニコフに身の上話を打ち明けられる場面、Bは連絡斥候に赴いた一行が銃撃を受ける場面である。どちらも、のちの展開を語るために重要となる場面だ。初出の表現よりも多くの言葉を費やして改められたことや、常体表現から敬体表現への変化など、相手に敬意を払って誠実に語ろうとする姿勢が強調されていることが窺える。これらの校異にみられる言い回しの変化は、コルニコフの語りの信用性を切実に訴えかけるための変化と捉える

ことができる。

以上を踏まえると、語り手〈私〉はコルニコフという元軍人の男性であり、自らの〈異常〉性について一部客観視しながらも、語りの信用性を高めようと努めて物語る人物として設定されているといえる。彼は一貫して、自身の体験した〈死後の恋〉が真実であると、他でもない〈あなた〉に認めてもらうために、語りの誠実さを念押ししているのだ。

しかし、物語の結末部分において〈私〉の話は信じてもらえず、コルニコフは独り残される。これには、彼の本当らしく語る「現実」的な部分と、本当らしくない「幻想」的な部分とがあるためだと考えられる。次節では本作品にみられる「現実」と「幻想」について整理していく。

第三節 溶け出す「現実」と「幻想」の境界線

先述した通り、作中における「現実／虚構」の二重性はすでに指摘されている。先行研究において「虚構」と捉えられてきた要素に関して、本発表では実在したロシア皇女の伝説を踏まえるため、作り上げられた「虚構」ではなく「幻想」と捉える。

本作品は、その舞台をロシアの町〈浦塩〉、コルニコフの語る出来事が起こった日を〈今年（大正七年）の、八月二十八日〉、コルニコフが独白する現在をその三か月後と設定している。これについて畑中佳恵（注三）は、場所や時間といった現実世界との類似、しかし物語世界は虚構であるという二重性によって、コルニコフの話の真偽を判断する際に「ためらい」が呼び起こされていると論じた。特に〈浦塩〉という地名そのものが「現実／虚構」を有し得るとし、現実と通じる一地点に設定されているながら「死後の恋」は日常と切り離されたところにあるとした。また、谷口基（注四）は、物語の中で断層的な時間が連結されており、〈死後の恋〉をコルニコフが語るたびにその出来事が追体験され、無限に循環されると指摘した。以上から、本作品には史実に基づいた「現実」的な部分と、ロマンス的な「幻想」の部分とが包含されているのは明らかだ。「死後の恋」という作品において「現実」と「幻想」の要素は交錯し、両者の境界線が曖昧に溶け出している。

ここまでは従来の研究で指摘されてきたことだが、本発表ではさらに、コルニコフの語りにおいても「現実」と「幻想」の境界が曖昧になっていることを示す。〈二十四歳〉という年齢に反した老人の姿であることや自らの〈異常〉性を認める発言、そして一人称の独白という発話者の主観に拠って再構成された語りであるということから、コルニコフは語り手として信頼できるのかという問題を孕んでいる。一方で、第一節で述べたように、語り手は自らの信用性を高めようと努める節が認められる。彼の独白は真実か虚偽か、どこまでが本当でどこからが本当でないのか、線引きが難しい。「現実」と「幻想」、両者の要素が生み出す曖昧さはコルニコフの語りや、ひいては物語全体に係っている。この曖昧さにより、「死後の恋」は一つの物語でありながら、多重の解釈を可能としているのだ。

また、ここで「現実／幻想」を巡る要素の一つである、実在の人物に着目する。「死後の恋」では物語後半に、〈凄惨な終結〉を迎えたロマノフ王家のうち四女アナスタシヤは生き

ており、男装して白軍に入隊していた、あるいはそれがリヤトニコフの正体であったと間接的に示される。最後のロシア皇帝一家の一員が実は生き延びていたとする伝説を彷彿とさせる設定が採られているのだ。史実では、一九一八年七月、ニコライ二世とその家族らが処刑されたことでロマノフ王家は終結した（注五）。実際はこのときに全員が亡くなったが、遺体の発見問題や矛盾点から、特に最後に死亡したとされる第四皇女アナスタシヤの救出説や生存説がささやかれ始めた。伝説が広まるにつれて、自身をアナスタシヤ皇女と偽って名乗り出る女性も数多く現れ、他の家族が殺害される状況でどのように生き延びたかを語った（注六）。こうした様々な説の発生に加えて、映像作品や書籍、舞台演劇の主題（注七）として扱われ始めたことから、アナスタシヤ生存伝説は「本当のアナスタシヤとは誰なのか」という謎を含んだモチーフへと昇華していく。夢野の「死後の恋」も、アナスタシヤ生存伝説を映した作品と捉えられる。コルニコフの独白が進む中で、ただの友人兵士であったリヤトニコフは、「その正体は何者なのか」という謎を含んだ人物に変化する。のちに、実は高貴な女性であったことが判明するわけだが、結末に至るまでその正体について考えが巡らされる。史実の「アナスタシヤ」は、その生存伝説や人々の膨らんだ夢想から、多重性を含んだモチーフへ昇華した。物語の「リヤトニコフ」もまた、複数の解釈を可能とする一つのモチーフとして機能しているといえる。

ここまで、作中にみられる「現実」と「幻想」について整理してきた。先行研究では作品内における「現実／虚構」の二重性が指摘されていたが、本発表ではコルニコフの語りにも「現実／幻想」が表れていること、ならびに物語全体に係る曖昧さとして発揮されていることを明らかにした。そしてその曖昧さは、物語の結末部分における〈あなた〉の判断においても作用しているといえる。独白を聞く側の〈あなた〉は、一度はコルニコフの話を受け入れるが、結局〈本当らしくない〉と判断する。どこまでを〈本当〉だと思い、どこからを〈本当らしくない〉と考えたのかも、曖昧になっている。すなわち、本作品は語り手の独白のみで構築されているのではなく、独白を受けて自由に判断する〈あなた〉の存在があるからこそ成り立っているといえる。次節では〈あなた〉について考察を深めていく。

第四節 独白を支える〈あなた〉

「死後の恋」において、コルニコフの独白を聞き、信じるか否かの態度を最終的に決定する受け手は、誰でもよいわけではない。その人物像は語り手によって想定され、〈あなた〉として提示される。

作中では、〈あなた〉は〈立派な日本の軍人さん〉であり、〈きつと日本でも身分のあるお方〉だと推測されている。その上、〈日本の軍人〉ではあるがロシア語が堪能で、ロシア人に対して深い理解と慈愛を持っているとされており、コルニコフにとっては自分の話を信じてもらうのに都合のよい相手であったと読み取れる。このように期待を受けて独白の相手に選ばれた〈あなた〉は、語り手の呼びかけを通じてたびたび存在を強調される。例えば、〈ところで一体、あなたはこの私を何歳ぐらいの人間とお思いになりますか、エ?〉とコル

ニコフが問い、「分からない?」と相手の反応を復唱することにより、「あなた」がそう答えたのだと分かる。反対に言えば、コルニコフの語りかけによってしか存在を示すことができない。つまり、独白の受け手である「あなた」は、「私」の独白に組み込まれた一部であると考えることができる。

しかし、「あなた」は最終的にコルニコフの望む判断を下さない。「死後の恋」は「本当らしくない」ために信じることができないと判断し、立ち去ってしまう。独白の相手として語りの構造に組み込まれていながら、彼の意に沿わない判断をとることが可能な存在と捉えられる。つまり「あなた」は、単なる聞き役や読者とそのまま結びつく存在ではなく、自由に判断し決定できる一つのキャラクターとして物語内に存在しているのだ。したがって、語り手と受け手の二者によって独白が構築され、さらにその構造によって「死後の恋」の物語は支えられているといえる。

第五節 おわりに

ここまで、夢野久作「死後の恋」について考察してきた。

まず、「私」の人物像の分析から、語り手であるコルニコフは自らの「異常」性を客観視する部分がありながら、語りの信用性を高めようと努めて物語る人物として設定されていることを明らかにした。

続いて、作中にみられる「現実」と「幻想」の要素について検討した。これらは「現実／虚構」の二重性として先行研究で指摘されてきたが、本発表では、さらにコルニコフの語る内容や物語全体にも「現実／幻想」の曖昧性が係っていることを示した。また、史実の「アナスタシヤ」と物語の「リヤトニコフ」を照会し、どちらも「その正体は何者なのか」という多重的解釈を可能とするモチーフとして機能しているとした。

最後に、独白の受け手である「あなた」に焦点を当てた。従来では読者や聞き役と捉えられてきたが、本発表では「死後の恋」の語りの構造に欠かせない存在であることを指摘した。独白を聞く側の「あなた」は、「私」の語りによってその存在を示されるが、自由に判断し決定できる一人のキャラクターでもある。語り手と受け手の二者は互いを必要としており、一人称独白体の形式と「あなた」の存在によってコルニコフの独白は構築されていく。さらに、この構造によって「死後の恋」の物語が支えられていると見出すことができる。

本作品は他の夢野作品と比較して、先行研究や作品への言及が少ない。一方で、同時代作家らの高評価を得ており、狂人といったモチーフや残酷美、複雑な語りの構造など夢野の作品を語るには外せない特長が鮮明に表れている。「死後の恋」は数多ある短編群の一作品でありながら、夢野作品全体に広がる魅力を大きく映した作品と位置付けられる。

第四章 今後の課題

- ・ 未確認の同時代評、先行研究（ナラトロジー、夢野久作研究含む）の調査。
- ・ ロマノフ王家、ロマノフ王家と宝石に関する資料収集。

・〈あなた〉〈貴下〉の表記揺れの問題について検討中である。一九二八年当時、一般にどのようなに用いられていたのか。また、夢野の他作品において呼称の変化はみられるかを調査したい。

・夢野作品のうち、「死後の恋」と同様に独白体を用いられたものとの比較を考えている。同じ作家による同じ語りの形態の作品を比較することで、本作における一人称独白体の意義や作品解釈を深めていきたい。取り扱う作品については検討中である。

第五章 注・参考文献

〔注〕

・本稿は『定本 夢野久作全集』第一巻（国書刊行会、二〇一六年一月）を底本とした。
・本作品および本稿では、今日の人権意識を踏まえると不適切と思われる表現およびその引用があるが、作品発表時の時代背景を鑑み、変更を行っていない。

（注一）夢野久作「死後の恋」では〈あなた〉〈貴下〉と混在しているが、本稿では〈あなた〉に統一している。

（注二）参考文献等では「アナスタシア」と表記されることが多いが、本稿では表記の統一をはかるため、夢野久作「死後の恋」内の表記「アナスタシヤ」にならっている。

（注三）畑中佳恵「夢野久作「死後の恋」の「宙ぶり」効果」『Comparatio』九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会、二〇〇一年三月

（注四）谷口基「解題」『定本 夢野久作全集』第一巻、国書刊行会、二〇一六年一月

（注五）古荘国雄「悲劇のヒロイン（アナスタシア姫）」『第一線に立てる女性』、金星堂、一九二七年四月）、桐生操『皇女アナスタシアは生きていたか』（新人物往来社、一九九一年四月）、ロバート・K・マッシー著、今泉菊雄訳『ロマノフ王家の終焉 ロシア最後の皇帝ニコライ二世とアナスタシア皇女をめぐる物語』（鳥影社、一九九九年一〇月）など

（注六）ロマノフ王家の一員を名乗る詐称者に関して、複数の事例が記録されている。とりわけ、一九二〇年に現れたアンナ・アンダーソンが自らをアナスタシヤだと主張した事件は、ロバート・K・マッシー『ロマノフ王家の終焉』（前掲）に〈二十世紀の最も有名なミスリーの一つであった〉と述べられている。参照は注五に示した書籍と同。

（注七）アナスタシヤ生存伝説を扱った諸作品には、主に次のものが挙げられる。

- ・映画「追想」（原題：Anastasia、一九五六年十二月）
- ・アニメーション映画「アナスタシア」（一九九七年一月）
- ・アニメ「ルパン三世 ロシアより愛をこめて」（一九九二年七月）
- ・小説（フィクション）・小川洋子「貴婦人Aの蘇生」（初出：小川洋子「貴婦人Aの蘇生」『小説トリッパー』朝日新聞出版、一九九九年夏季号）二〇〇一年夏季号、初刊：小川洋子『貴婦人Aの蘇生』朝日新聞社、二〇〇二年一月）
- ・ミュージカル「アナスタシア」（宝塚歌劇団、二〇二〇年十一月七日、宝塚大劇場にて

初演) など

【参考文献】

- ・国枝史郎「マイクロフォン」(『新青年』第九卷第一三号、博文館、一九二八年二月)
- ・大下宇陀児「思出の夢野久作氏」(『月刊探偵』黒白書房、一九三六年四月)
- ・江戸川乱歩「夢野久作氏とその作品」(『探偵春秋』春秋社、一九三七年五月)
- ・白石啓一「社会派の先駆——随想・夢野久作」(『みすてりい』第四号 夢野久作研究号、推理小説研究会、一九六四年一〇月)
- ・中島河太郎「夢野久作登場」(『推理界』浪速書房、一九六九年一月)
- ・小森陽一「構造としての語り」(新曜社、一九八八年四月)
- ・「皇女アナスタシア 処刑されていた」(『朝日新聞』朝刊、朝日新聞社、一九九四年九月一〇日)
- ・『新青年傑作選第三巻「新装版」』(立風書房、一九九一年八月)
- ・西原和海編著『夢野久作の世界』(沖積社、一九九一年一月)
- ・溝畑康史「『死後の恋』編集後記——『ドグラ・マグラ』を読む前に」(『彷彿月刊』古書を巡る情報誌) 弘隆社、一九九五年四月)
- ・『江戸川乱歩全集 第二八巻 探偵小説四十年(上)』(光文社「光文社文庫」、二〇〇六年一月)
- ・『江戸川乱歩全集 第二九巻 探偵小説四十年(下)』(光文社「光文社文庫」、二〇〇六年二月)
- ・多田茂治『夢野久作と杉山一族』(弦書房、二〇一二年九月)
- ・『KAWADE 夢ムック 文藝別冊 夢野久作あらたなる夢』(河出書房新社、二〇一四年二月)
- ・日下三蔵「編者解説」(『死後の恋——夢野久作傑作選——』新潮社「新潮文庫」、二〇一六年一月)
- ・土肥恒之『興亡の世界史 ロシア・ロマノフ王朝の大地』(講談社、二〇一六年九月)
- ・下斗米伸夫『増補改訂版 凶説 ソ連の歴史』(河出書房新社、二〇二一年一月)

- ①…日本小説文庫『押絵の奇蹟』（春陽堂、一九三二年一月）
 ②…『氷の涯 夢野久作傑作集』（春秋社、一九三五年五月）

B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	初出（『新青年』）
原ツパが薄明るく	恐ろしくふり返られて、	四方には何の物影も	さうして、	……で……	耳にしてゐたのですが	一パイに溜めて、うなだれて	弟が僕の名をば呼んで、助けを求めたこと	たつた一人	私が仲間の者に	
原ツパが薄明るく	ふり返られて、恐ろしくて堪らなくなりましたので、	四方には見渡す限り何の物影も	……で……かうして色々と考えまはした挙句、	……ですから……	耳にしてゐたのですが	一パイに溜めてサツクの蓋を閉ぢながら、うなだれて	弟が、僕の名を呼んで、助けを求めたこと	たつた一人シヨンボリと	私がリヤトニコフや仲間の者に	初刊（『夢野久作集』）
原ツパが薄明るく	ふり返られて、恐ろしくて堪らなくなりましたので、	四方には見渡す限り何の物影も	……で……かうして色々と考えまはした挙句、	……ですから……	耳にしてゐたにはゐたのですが	一パイに溜めてサツクの蓋を閉ぢながら、うなだれて	弟が僕の名を呼んで、助けを求めたこと	たつた一人でシヨンボリと	私がリヤトニコフや仲間の者に	日本小説文庫『押絵の奇蹟』（①）
原ツパが星の光りで薄明るく	ふり返られて、恐ろしくて堪らなくなりましたので、	四方には見渡す限り何の物影も	……で……かうして色々と考えまはした挙句、	……ですから……	耳にしてゐたにはゐたのですが	一パイに溜めてサツクの蓋を閉ぢながら、うなだれて	弟が銃口の前で僕の名を呼んで、助けを求めたこと	たつた一人でシヨンボリと	私がリヤトニコフや仲間の分隊の者に	『氷の涯 夢野久作傑作集』（②）